

民具マンスリー

[編集担当] 角南聡一郎 樫村賢二 神かほり 浜野達也 加藤友子

[編集協力] 刈田 均 佐野賢治 鈴木通大 森本仙介

令和時代・民具マンスリーの取り組み

角南 聡一郎

2022年度、『民具マンスリー』第55巻誌上には、21本の論考、「民具短信」7本、連載「アチック・ミュージアムの民具コレクション」3本、「民具マンスリー編集室研究発表会」1本、書籍紹介2本、施設紹介1本を掲載した。コロナ禍で大きく変化したのは、デジタル化の推進である。大学の講義でもオンラインやハイフレックスによる受講が実施されていた関係で、民具に関する情報の発信や活用もオンライン利用によるものが増加したことが特徴であろう。そのような世相の変化は、モノそのものについても影響を与えていると考えられる。デジタルと民具との関係を象徴するのは、道用大介「デジタルファブリケーションと民具」(55巻6号)であろう。

デジタルファブリケーションとは、3Dプリンターなどのデジタル工作機械を使用したものづくりのことである。また、ファブラボとは、個人による自由なものづくりの可能性を広げるための、デジタル工作工房とそのネットワークをいう。2014年、湘南ひらつかキャンパスにて誕生した「ファブラボ平塚」が、みなとみらいキャンパスの開設とともに機能を移転し、2021年春に、「ファブラボみなとみらい」として運営をスタートしたものである。ファブラボは個人による自由なものづくりの可能性を広げるための実験工房である。ここでは3Dプリンターやレーザー加工機などのデジタル工作機器の利用ができる。また、世界に広がるラボと連携するグローバル・ネットワークでもあり、ものづくりの知識、ノウハウを共有しながらものづくりの可能性を広げることを目的としている。道用は「デジタルファブリケーションで人々がつくっているものは現代の民

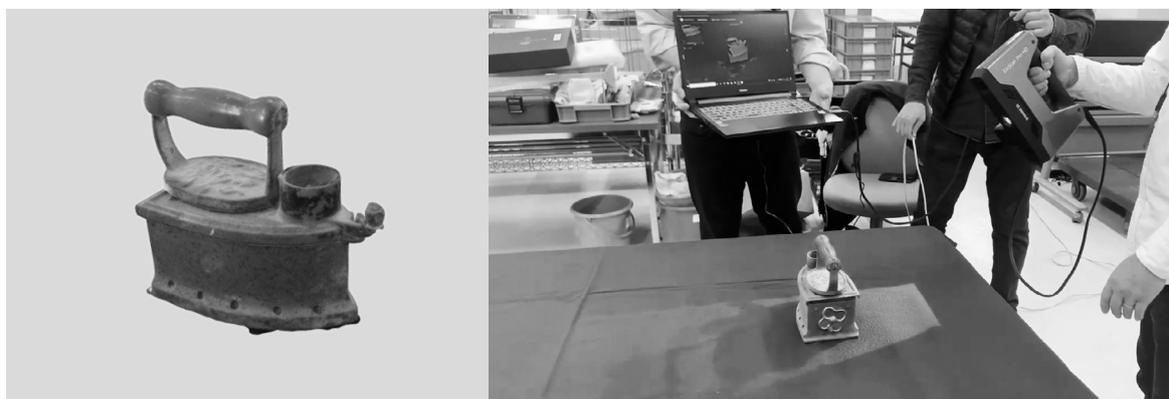


写真1 民具の3Dスキャン体験〔道用2022〕

具ではないのか？」と問いかける。実際に道用は、「個別共同研究 歴史民俗資料とデジタルファブリケーションの可能性の研究」の活動の一環として、常民研所蔵の歴史民俗資料を3D スキャンし3D プリントなどにより複製を作成している。こうしたことで、歴史民俗資料の展示において、現実世界の3次元にデジタル世界の次元を加えるという次元拡張の可能性、さらにはインターネットを通じてデジタル世界とのフィジカルの世界を通じて往来する物体移動の可能性が広がることも指摘した(写真1)。こうした試みは、空間が限定された常民文化ミュージアムでの展示で大いに活用できるのではないかと考える。

岡本夏実「地域博物館における海外由来の資料の活用例——行田市郷土博物館所蔵「木彫りの靴」をめぐる——」(55巻6号)は、行田市郷土博物館所蔵の「木彫りの靴」の概要と、資料が同館の企画展「足元から紐解く生活史」(会期2021年10月9日~11月23日)で展示されるまでの経緯を紹介している。行田市は近世以来の地場産業として足袋作りが盛んであったことから、本企画展では古代から現代に至る履物の歴史から、履物と地域との繋がりまでを捉えようとしたものである。「木彫りの靴」は、市内の小学校から校内に保管されていた他の資料とともに館に寄贈されたものである。その形態から、朝鮮半島で用いられていたナマクシンという雨天用の木靴であるとされ、本資料の側面には紀年(明治44<1911>年)を含む寄贈者名などの墨書がみられる(写真



写真2 木彫りの靴(行田市郷土博物館所蔵)[岡本2022]

2)。岡本は企画展開催時には不明であった、寄贈者について調査を推し進め、館蔵の年賀状から京城に居住していた人物であることを明らかにしている。朝鮮への移住政策により現地で生活した人の手によって、日本へと持ち帰られた民具が地域博物館に所蔵され展示活用されているという点で、重要な事例であるといえよう。

鈴木通大「自治体における二次資料の保管と活用について——民俗資料を中心に——」(55巻9号)は、2022年6月27日に実施した、民具マンスリー編集室での研究発表会を成文化したものである。かつて自治体で自治体史などの編纂のために調査された、二次資料(民俗資料カードのような情報資料)のうち民俗資料に関するものが、神奈川県下ではどのように取り扱われてきたか、について実体験をもとに話されたものである。フィルムネガも含めた情報資料をどのようにデジタル化し、データベースをおこなうか、それらを公開し活用に資するためにどのような問題があるかについてなど、先のデジタル化の問題とリンクする内容でもある。

55巻11号は西浦直子「ハンセン病療養所の自助具、義肢、補装具をめぐる」、木下直之「義

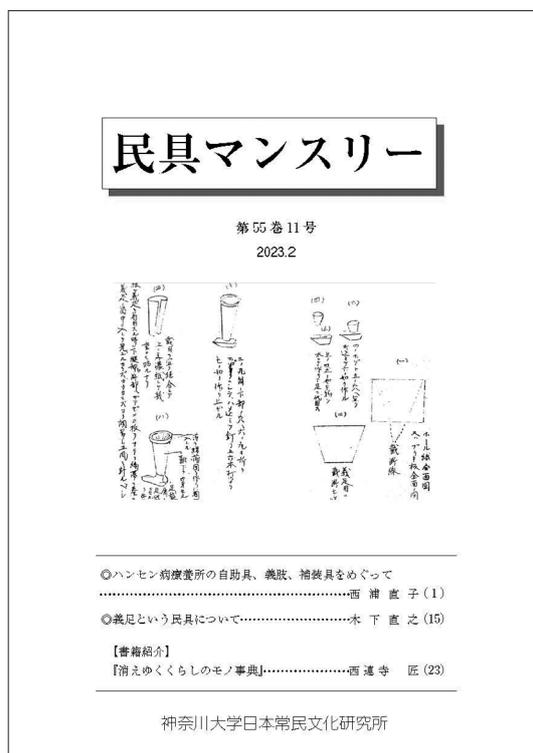


写真3 『民具マンスリー』55巻11号表紙

足という民具について」が掲載された。いずれも国立ハンセン病資料館で2022年に開催された「企画展 生活のデザイン ハンセン病療養所における自助具、義肢、補装具とその使い手たち」（会期 2022年3月12日～8月31日）に関するものである（写真3）。木下は「ハンセン病者の生活を道具によって可視化したという点に、「生活のデザイン」展開催の大きな意義がある」と指摘する。民具として取り扱われることが少なかった、身近卑近の道具についても言及していくことは、『民具マンスリー』の課題の一つであると考えられる。

プラットフォームとしての YouTube 版「民具を語る」

2022年度の「民具を語る」の活動は、諸事情により YouTube 版での動画の公開はなかった。元来、「民具を語る」は対面で実施されていたもので、コロナ禍で実施できなくなったことを受けて、YouTube 版が誕生したのである。YouTube 版は、いつでもどこでも手軽に視聴できることから、オンラインで開催されていた「民具を語る」よりも、より広い範囲で情報を公開することができるようになった。次なる段階として、YouTube 版をプラットフォームと捉えて、『民具マンスリー』誌面に反映させることが検討された。例えば、次のようなことが想定される。動画を凝縮した内容を『民具マンスリー』誌上に掲載し、そこに QR コードを提示する。ここから YouTube 版を手軽に視聴することができるようになる。また、YouTube の概要欄に、『民具マンスリー』に掲載された文章版の情報を掲示し、紙面を相互補完的に利用するように促す。

このような QR コードの活用は、常民文化ミュージアムでも実施することができるであろう。展示の中で「民具を語る」の動画と関係するものがあれば、展示パネルに附設する形で、QR コードを提示しておく。ここから、動画を視聴してもらうという方法である。QR コードの作成が簡単にできるようになったこと、無料で利用できるようにもなったこと、そしてスマートフォンで QR コードを撮影することにより、動画サイトへと移動することができるようになったことなど、状況は日々進歩している。

2022年度は、対面による「民具を語る」の開催は見送る形となった。しかしながら、2022年度末にはコロナ禍の状況も安定してきたため、次年度の計画として対面開催についても議論された。2023年度からは、対面版、YouTube 版、『民具マンスリー』誌版の三つのパターンの「民具を語る」を並立させつつ、それぞれの特徴と強みを活かしながら「民具を語る」を執り行っていく予定である。

■ 2022 年度の活動

- 『民具マンスリー』取材 2022年8月19日～21日 福島県立博物館・ただみ・モノとくらしのミュージアム 神かほり
 - 「民具を語る」撮影および取材 2022年10月23日～24日 徳島県立博物館 樫村賢二
- 【『民具マンスリー』編集会議日程】

日		程（通算）	
第1回（第409回）	2022年4月25日	第5回（第413回）	2022年9月5日
第2回（第410回）	2022年5月23日	第6回（第414回）	2022年10月17日
第3回（第411回）	2022年6月27日	第7回（第415回）	2022年11月7日
第4回（第412回）	2022年7月25日	第8回（第416回）	2022年12月16日
第9回（第417回）	2023年1月16日	第10回（第418回）	2023年2月16日
第11回（第419回）	2023年3月16日		

※第1・2・4～7回はオンライン併用、第3回は対面会議、第8～10回はオンライン会議、第11回はメール会議